今四歌仙

中村俊定文庫
文庫 18
830

宗像田中文庫

中村俊定文庫

よハ雪ゝ降ときこえすゝ埋れ　禾本

埃の中ゝ至うなのも　桐雨

ひね物ゝ塚物かゝへる市立て　枯室

合きくえきハかゝ下戸ゝ　小圃

夕ゝやさすらゝかゝ雨と勝ゝ　雨

今度ハひきゝ迄い秋ゝ　木

主婦より居そうち　沾井なるひ　圃
咲つさ合て　係とまるなり　室
言新うまとまれハあけふき　木
荒神　柳より　ゆ市るる仙　雨
清徳を一節なる　株貫て　室
ちかうちんま　侵寸ハえぬ　圃
月の初越　菓子のをえており　雨
彼岸よなれと日まう造作　木

安乗て安乗を里好出つて　圃
服紫さうよ大神な　桜　室
ひるをなまさうたもと　野分　木
衆の厠へはいる　雀る　雨
雷盃て豆の形をくはせさ　室
法行止中の風つつれと　圃
を七丁迄て　袋を借おはず　雨
秋雲梨よを一てうを　木

元自由なりてさきなきたり利　圃

戸柳の番はなるなれ　室

癖なる様、起の咳を思いこ　木

をい畑へ十日菓を落く　雨

一志きう向ふもえすもあれ　室

家うちかくしに汁をあふ　圃

秋の月客もいうもたを並　雨

いくばくもなるぬ養むし　木

刈入れるさるふるよ稲穂稲　圃

菩提を賀て寺の洗濯　室

馬好き話やいてさんざらし　木

茶つぼ中へわるる茶壺　雨

むよもてゆぬとわうつ　室

夏をさもうよ寒い一羽　圃

下りまつるべしやたく茂哉　小圃
豆柿を乞ふる谷村人夢　禾木
木賃宿併せしら仮をいそがせて　桐雨
柿を通るすれハ搗めらるゝふ　柳室
節分と除夜と同じ月なく　木
ちらり一ちらと雪を迎る　桜圃

敷うてハ好法志さゝおれうる　室
ふつつゝとゆくえゆくわる　砕雨
不始末のもちハ安所もあちゝ方　圃
ろ聖者のなハいかとゝ仏　木
同ようなぬ貴のかゝ家のも　雨
木先うゝやゝ小るちつまゝ　室
二九のを敷ゝもたれの月　木
生得純なゝ此ハ入紙む　圃

でつなぐほうをのぞきをしまうて　室
ぎりいてく　堂の汗　兩
花さかりたちまちをぶきれ　圃
ちはくらの泉へ舳　尿もれ　木
生贄と男ととても相性ふり　兩
淡つちなくて泥てけうつ　室
度さぬを合点てかしく古拷　木
川の向ふハ今ゆなのまぬ　圃

世間者の垢離なんとたさい金　室
下筋ぬいてまをつあうう　兩
秋のうハ金の神さま勤うれ　圃
室と室はなて遣ふつきふ　木
麦踏ゆ因蔵かく駒ヶを　兩
用ゆなるやまつさ　室
ほちくと水引きの赤ゝ休寸　木
強本流しまゆ毛六町ゆく　圃

奥ゟ出ス事もむつかく病上り　室
入て居るうちハ大立情出す　雨
御さの通りハ日々に強るあり　圍
むしろゟむしろ蔵干ゟ出る　木
毛ゟ来て逗留ゟ倒ゟ成　雨
毒ゟ多ク出る　雑種の訳　室

田へ出る事ゟよろしく成ル　桐雨
雨ゟ出ス事むつ　夜ゟ雪　梅室
見る事ゟ時計ゟ号打て　小圍
とゝゟ来ゟ来ぬ状　禾木
月ゟ見ル時ゟ次ゟ奥ゟ小一丁　室
きゝゟの多ク出る木屋の奥　雨

放生をしてよく体さうれし山谷抵　木

鴛のあと追て仕の下話け　圃

豆腐をよげさのおれを入まをう　雨

虎よ脾のきれる ほうまて　室

大雪てまこつくるの拾ところ　圃

そおうは接ぎとうなわもん清　木

荊を見て連生未る身の秋　室

俗い喬木よ果嚙をうつ　雨

栗柿てを一さいある居科　木

ひのもむ月てう多麝邪なう　圃

彼岸中ひ弥陀もおて絲ませる　雨

酴醾簾のんて東風よ好ま　室

寄数をとて頃ふふもし　圃

肱つさあふて森てぬ文合　木

きいをつ枝をたくハふくこゆる　室

むしろかうへよ地るの佗言　雨

洗濯の二度とはきあ漂そめ　木
産屋すてかられしおほせる　圃
もよふ休よそから扱きと捨て主　雨
入梅と出雨と入きかてる羽　室
田舎よハるゝ者を賣よ来る　圃
持ゑ志れぬ辻ゆ主住　木
極月のハはハ只の月てほし　室
小和尼を見れハ年ゆ經よ　雨

ものいて俄分限のわるなり　木
叶ふとつれと棒鼻ゆとむ　圃
恨子のはいゝぬやるゆ訪ゝく　雨
田懸ゆ訪と言のうち　室
ゆとゝはゝれらゝれむ暑り　圃
まつゝゝ新き草の干つ　木

水門のうちかたくあ鶏ふ　梅室
西はよなれハ近う入　枯芒　小圃
枝枯葉とともに苔の口ぬるて　禾木
裏戸の透へ落ちさはる　桐雨
落さるる葉て時きる音さ月　圃
築を下りる　蛍　すゑ　うつ　室

秋先ハ搗桶をかつく秋乃宿　雨
あう肌さむき音葉のあと　木
村深のいまよなれハ好ましなる　室
桶紹の灯く買うる常　圃
空蛍をふさくるる迷ふ俄ふ　木
ちるきくれの丁雑うる　雨
も下形を当るもえを寄らん　圃
地竹ふと伯ふ　ふ　牧方　室

孫もゝへ出ろわと落る蒸のる　雨
氣持のきかぬ焼糸の辞宜　木
ゆゝしさ松のやゝもゆる身　室
町てゝ納豆くゝくるする　圃
俗人の自由なるぬ芋殘え　木
挑灯をゆる格の下りくち　雨
有答ゆ変み切まる乳の茶　圃
ゆゝ入られて口舌あつゆる　室

足次ゆ楽くゝ娘ろ粽ゆ弘　雨
出つもおゝこむ居伯ゆ寵　木
ゆゝうゝてちゝのゆもも敲つ　室
ろくゝゆえぬ萩のちゝ寺　圃
一外の代すさまじ身の芋　木
夜ゆ下ハ牧のかゝら　雨
方角のかゝとゝ巻ゆのち　圃
殘もの札ゝ摽ゆを出　室

枕ぬ〻吟すゝ香ゝよ客かめて　兩

咲くさきぬ　奈良めぐり七寺　木

三人ゝ賤布一ッのでぬしさよ　室

ひゆめぬ〻と休ひ〻よあ〻　圃

とこまてを垣ねつきのむぬり　木

ほき秘の思ひ小簾さ〻　兩

余與

枕をかまて来つむ里ゝ附多　小圃

麦ゆ〻のそめ〻わ〻き音　桐羽

水掘の杭をくさ〻もふ〻　梅室

面〻あとゝくはき干鰯荷　禾木

喰好の笠とはなされ夜をて　羽

うちてい拾ゝ見てよ　圃

460
ト

于時天保二辛卯年
夏五月上木

江戸通油町
仙鶴堂鶴屋喜右衛門梓